

保育方法の問題点

保育のカリキュラムについて

広島大学 池田勝人

保育カリキュラムについて三原市保育プランを作った際の考え方は次の通りであって、これは今日においても大体正しいと思われる。

(一) 目的保育(単元保育)

幼児は幼児なりの目的を持って活動している。したがって目的保育をおこなうべきであり、単元を設けて保育する方法、すなわち単元保育の方法が必要である。

(二) 系統保育

子どもの内に持つ能力、伸びゆく発芽を見つけその見つける目を養って、その発芽を伸ばして発達に系統に応じてこれを系統的に保育する必要がある。

(三) 日常の生活課程

日々の生活、季節の変遷あるいは行事などの実際生活に応じて指導していくところの日常の生活課程による保育が必要である。

「カリキュラムの無用論」

本当に子どもの個性をみつめて指導していく上には計画の必要はない。あってもそれは紙上プランで無意味である。こう考える人もあるが、しかし一応計画を立て、個別指導なり子どもの個性に適した教育をしていくのがよいのではないか。

「幼稚園の教育計画の実際」

現場の先生が計画の中に何もかも折込みすぎるのではないか。カリキュラム作成において、どのようにくりどのように生かしているかが問題である。また幼稚園も保育所も小学校に付設されているところは、小学校に大きな束縛をうけている。

「カリキュラムの構成の理論」

○発達に即応すること

入園時と卒園時あるいは二年、三年たつてもカリキュラムが同じではいけない。三年保育が悪いということはカリキュラムが同じであるからである。本当に発達に応じたカリキュラムであるならこうした問題は生じないはずである。

○経験、組織の問題

どんなときにどんな内容で経験さすか。社会からの要求、子どもの能力を考えて、組織立てるべきで、厚生省でも文部省でも一応基準が出来ているが、内容が羅列してあるだけで、これによってカリ

キュラムを構成することはむづかしい。したがって一応自分でカリキュラムを構成し実施してみ、検討して配列を考え直すというような方法が有効ではあるまいか。

○日課の問題

次にカリキュラムを日々の保育にどんなに展開するかの問題がある。一斉保育か自由保育かグループ保育と個別保育との問題がからんでくる。

○保育形態

一斉保育、自由保育、グループ保育、個別保育などいづれをとるべきかというような問題であるがこれらにはある程度の調和点があると思われる。

小学校入学前における指導と

入学後の指導について

広島教育委員会 樋口 正司

これは幼少一貫教育といえる。さて広島の実状をみると広島県の幼稚園、保育所数は、五八三、小学校は六八〇であり、その比率は、小学校の八五％である。広島市では前者は一〇三、後者は四四で二四〇％である。

次に、小学校入学児の内、幼稚園、保育園に通園していた数をみれば、昭和三十年度は七六％、同三十一年度は七七％、同三十二年度は八七％、この結果からみればもはや入学前にそうした所に通うことは教育の常識になってきている。小学校一年の担任が、保育園幼稚園から来た子どもをどう見ているかを調べてみたその一例とし

て「小学校一年を担当して困った点を五つあげてください」という質問を出した大体の答は、躰については、内気、すぐ泣く、集団生活に馴れていない、馴れすぎている、がさがさしている、自己本位、よく喧嘩する、物を大切にしない、おやつをほしがるなどの子ども、学習面においては、発表しない、声が小さい、自分の名前が読めない、文字を知っていても筆順がちがう、しつたかぶりをするなどの子ども、共通して言えることは、能力差が大きいということである。

その他小学校だけの問題としては、一学級六〇人もなのでゆきとどいたことが出来ない。時間割が一律に固定しているなど。

「小学校一年の担任として幼稚園、保育所の先生に望むことは」については、基本的しつけを十分にしてほしい、甘やかさないように、字や数は機械的記憶に終らぬように、幼稚園語を直すこと、小学校の教科課程を研究してほしい、父兄の意見に迎合しないように、指導要録を送ってほしい、問題児はあらかじめ連絡してほしいなどである。

能力差の問題は特にやかましい問題であったが、子どもには正常な能力差があるのが当然で、これを一定に限定してしまつてはかえつて発達のおけになると思える。しかし、保育園、幼稚園で必要以上に能力差をつけることはいけないと思える。

カリキュラムについても一年生には、生活中心的方法を折り込みたいものだ。

要するに幼稚園、保育所と小学校低学年を含めた幼年教育の考え方をおしすすめていかなければならないのではないかと思う。

結 論

一、小学校の先生は、もっと幼稚園、保育所のことを研究する。